

鳥井村と有定村（鳥井町）

豊地区には、今の日野川が無かった頃の伝説が幾つか残っています。その中の一つに、鯖江地区の有定町は鳥井町の出村だったという話があります。

今のわたし達には、大きな日野川を挟んで川向かいに分家するというのは、おかしい話に思えますが、日野川の本流がひな川と言って岡山の方へ流れていたとしたら、当然考えられたことです。

また、日野川についても伝説があり、昔の日野川は大雨が降る度に流れが変わり、今の万慶寺（鯖江地区）の下の通り（北陸街道）の西側の崖下は大雨が降ると濁流になり、日野川と呼ばれていたとも言われています。

また、大昔、鳥井村と有定村の間を流れた川は、泥水で川幅が狭く、歩いて渡れたという話ですが、

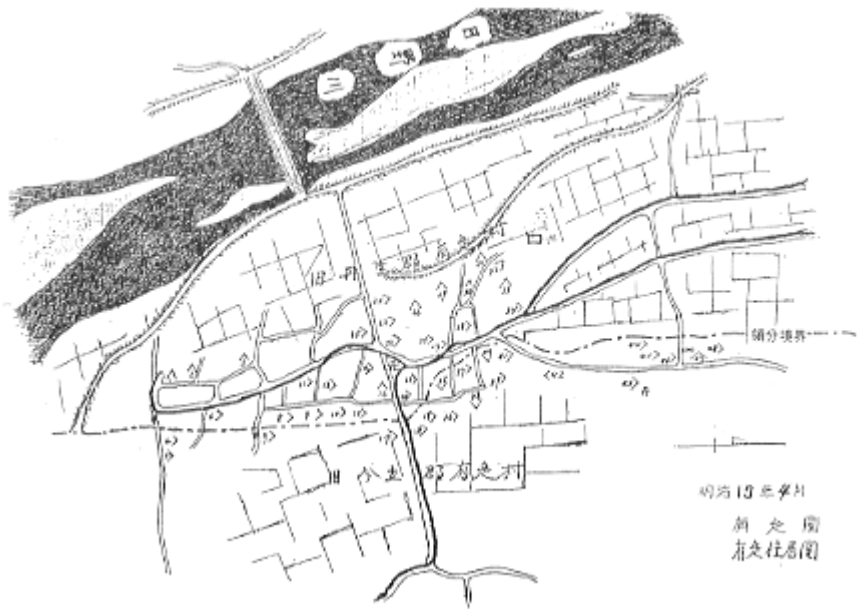
今から四百年ほど前に、豊臣秀吉がこの辺りの田畑を測りに来られた時、大雨が降って海のようになつたのを見て、

「これでは、住民（住んでいる人）が、かわいそ
うや。なんとかしてやらねば。」

と言って、人夫を大勢使つて川を掘らせ、雨が降ると今の日野川に流れるようにしたとも言われています。

このような言い伝えから考えると、大昔の日野川は今の日野川とはずい分違つて、大きな橋が無くて渡れた小さな川だったことが想像できます。もう一つ、今の日野川の流れは、昔とは違つてという見方のできる資料として、明治十三年に書かれた有定村の地図があります。

この地図を見ると有定村の村の中は、小川を境にして東西に分けられています。小川から西の方は、丹生郡有定村といって鳥井村と同じく幕府直轄の天領であり、小川から東の方は新しく開けた



所で、享保六年（一七二一年）に、鯖江藩になり、今立郡有定村といわれました。

このように、村の中を流れている小川は、政治を二分しているわけですが、果たして昔も小川だったのでしょうか。

ともあれ、鳥井町と有定町は昔から大の仲よしでした。どちらも丹生郡であり、その昔は御板部郷と言って氏神様も御板部神社（現在の春日神社）で、お祭りも盛大にやっていました。

鳥井村と有定村には、有定の渡しがあり、大きな日野川になっても、村人は互いに助け合っていました。

明治四年に神仏分離令がでた時には、十一面観音像を鳥井村から有定村へ運んで、有定村の人達が今も、お守りしています。

また、大正十四年に、春日神社の拜殿が出来たときには、有定町の加藤長右衛門さんから青年四人が、右大臣、左大臣を購入して、一体ずつ、もつ



こに入れて、ぼうこでかつぎ、エツチラ、オツチ
ラと日野川の橋を渡つて奉納ほうのつされました。

春日神社のお祭りには、いつも

「うららが、かついで持つてきたんにや。」
と言われた加藤さんも、今は亡なくなりました。

時代の流れと、川の流れの变化へんかによって、鳥井
町と有定町はくつついたり、離はなれたりしましたが、
そこに住む人達の心こゝろの結び付きは温あたたかく、今も、
脈々みやくと続つづいています。